

1. 巻 頭 言

不 純 物 不 変 の 法 則

榊鈴木商館 鈴木 譲

現代人類のクリーンテクノロジーとは、いったい何であろうかと時々考えさせられる。そもそもクリーンとかピュアとか言う用語が氾濫していて、流行語のようになりその本来の意味を忘れさせようとしているのではないだろうか。

食品の発泡スチロールトレイにラップという包装を数年前までクリーン包装と言ったりしていた。これは衛生的なようで、見た目にきれいに見える事をアピールする為なのだろうか。雑誌、印刷物においても見た目に美しい上質紙にカラーグラビアというものが氾濫している。

ところが、発泡スチロールにしてもカラーグラビア印刷物にしても大変あと始末に困るしろものである。資源保護、環境保護を訴える印刷物に再生紙を使うようになったのはごく最近になってからである。

御承知のように日本の半導体生産技術は世界のトップレベルになっている。この分野を支えているものの中に超微細加工技術、超クリーン化技術などがあると言われている。LSIの集積度が上るたびにクリーンルームの清浄度、製造工程で用いられるガス純度、水の純度などが上らなければならない。これらを上げる技術が半導体産業におけるクリーンテクノロジーと定義される。ところが、この人類最先端のクリーンテクノロジーを持ってして地球を救えるであろうか。

自然界にはエネルギー不変の法則というものがある。これに対し人間界には不純物不変の法則というやっかいなものがあり、現代人類のクリーンテクノロジーはこれを逸脱してはいない。我々が住いのそうじをする際ほうきでゴミをかき集める事と、最先端の純化技術とは本質的に変わらない。ゴミにあたるものをかき集めるものが超微細孔のフィルターであったり、物理的あるいは化学的なゲッターであったりするだけで、濃度差を人工的に作り出し濃縮させた不用物を捨てる方法である。この方法は便利であるが地球規模で物事を見た場合不純物の総量は変わらない、すなわち不純物不変の法則の支配下のままである。更に困った事は人類が自然界に存在しない不用物を次から次へと新たに作り出して来た事であろう。

自然の循環サイクルを無視して来た人類の末路は、夢の島や産業廃棄物処理場を見れば想像に難くない。本来のクリーン、ピュアの意味とはいったい何だったのかを思いかえし、自然の循環サイクルへの適合を念頭において活路を見い出すべき時代の致来と言えよう。考え方を変えればこの事は危機ではなく、人類が次のステップへ成長する過程と言えよう。やさしく育ててくれた母なる地球に対し反抗期もすぎ、大人に成長した人類が親孝行を出来る日も近いかもしれない。